

金沢のキャリア教育 2年間の校内研究のあゆみ

1 はじめに

本校は、平成21～22年度に神奈川県教育委員会より「特別支援学校におけるキャリア教育」の研究指定を受けた。本校は肢体・知的の併置校で、いわゆる重症心身障害の児童生徒も多数在籍している。そうした学校が研究指定を受ける意味は、単に職業観・勤労観を育む知的障害教育におけるキャリア教育ではなく、重度重複そしていわゆる重症心身障害の児童生徒までも含めた特別支援学校におけるキャリア教育はどうあるべきかを研究することにある。

2 平成21年度の取り組み

本校は、当初より学校教育目標に「自立と社会参加」をかかげ「生きる力」を育む教育課程を編成して平成20年4月に本格開校したが、「キャリア教育」という概念は未知のものであった。

そこでまずキャリア教育推進プロジェクトチームを立ち上げ、キャリア教育の研究先進機関(国立特別支援教育研究所、小金井特別支援学校、羽村特別支援学校など)の研究発表会等にメンバーを派遣して情報収集を行い、その成果を啓発資料にして教員に配付した。また校内及び公開研修会を開催して全教員に基礎知識と共通理解をもってもらうことに重点を置いた。

立教大学大学院 渡辺三枝子教授<国立特別支援教育総合研究所セミナー研修>からの学び

- ・「キャリア教育」とはプログラムや教科内容をさすのではなく、考え方・理念である。その理論的裏づけは「キャリア発達段階」という考え方である。
- ・何かの教科時数を削って、特別な授業を取り入れるというのではなく、教育の意味そのものを問い直す「改革運動」のひとつといってもよい。今できること、今しなければいけないことは何なのか。キャリア発達という視点で問い直すことである。新しいことをやるわけではない。今までやってきた活動を、なぜやるのか、なぜ必要なのかという目的に、「キャリア発達を促そう」という目的を加えればよい。
- ・無意識的にやっている活動がある。また就職をめざすためと思ってやってきたものが、そのためだけではなくという気付き活動も出てくる。
- ・すべての子に将来がある。生きる権利がある。教育がいらないという子はいない。

東京都立小金井特別支援学校の公開研究発表会からの学び

- ・1年目は「なにをもってキャリア教育とするのか」「キャリア教育にはどんなものが含まれるのか」「どういう場面で取り組むのか」といったことを学部学年で真剣に論議した結果、新たに一から取り組むことなく、これまでの実践を洗い出し、再認識したり整理したりする作業だという今後の方向性が明らかになってきた児童生徒の課題をキャリア教育の視点で整理したところ、「挨拶」「身だしなみ」「順番を守る」の3つがほぼ全員に共通した課題であることがわかった。
- ・また研究を進めるなかで、キャリア教育は働く人になるためだけの教育ではなく、「仕事」「生活」「余暇」のバランスが取れるような人になること、さらに卒業後も興味あること、好きなことへの追求、つまり「学び」を続けられるような人になることも大切だといった話になった。
- ・進路担当者は、卒業後の朝起きてから寝るまでの各場面を想定して、それぞれの場面で必要となる「マナー」「ルール」「スキル」を洗い出し、それをキャリア発達段階表と照らし合わせて、卒業後のつまずきがひとつでも減るようにという視点で、課題を系統だった指導に組み立てていった。

おもな校内研修会

- ・6月 校内研究全体会(本校副校長:キャリア教育オリエンテーション)
- ・7月 公開研修会(岩澤佳代子氏:就労に向けて必要なスキルについて) * 県立みどり養護学校校長
- ・11月 校内講演会(松為信雄氏:障害のある児童生徒のキャリア教育) * 県立保健福祉大学教授
- ・2月 校内研究協議会(菊地一文氏:特別支援学校におけるキャリア教育の意義と実践)
授業を見ていただき、キャリアの視点で指導助言していただいた。
- ・3月 校内講演会(石渡和実氏:重い障害がある人の自分らしい暮らしと地域の支え)

校内研究全体会:キャリア教育オリエンテーションからの学び

- ・ キャリア教育=進路につながるものだと思っていたが、子どもに必要なものを考えていくものだった。金沢のキャリア教育はもっと幅広く考えてよいと思った。
- ・ 狭い意味での進路、キャリアではないことがわかった。小学部では日常生活についての指導で、今やっていることでよいと思った。12年間の系統性を持たせることが大切で、重心の子らにとってはQOLを高めることが大切。
- ・ 文科省ではなく金沢養護学校の(実態に照らし合わせた)キャリア教育として考えていくべきで、今やっている一つ一つのことがキャリア教育につながっていくのでは。
- ・ 本校は作業着を着るなど職業教育色が強いのに、その作業服を自分で着られないなど日常指導している生徒と、一般的なイメージで言う「キャリア教育」は結びつかなかったが今日の話でわかった。学校の方針が変わったと思った。
- ・ 今日の話聞いて少し理解ができ、共通理解がもてた気がする。キャリア教育=進路、職業というイメージだったが、学校全体で取り組んでいく、というのはいいと思った。
- ・ キャリア発達段階をつめていくことで、現在曖昧な高Bの「コース選択」のひとつの指針というか、サンプルになるのではないか。コース制は必要か、教室を分けたことによる効果は何か得られたのか?など、これまで疑問視してきたことにまだ何の決着もつけていない。その地固めをした上でのキャリア教育ではないか。また、逆の発想でキャリア教育を考えることで、コース制の意義が見出せるかもしれないが…。
- ・ 「出口の教育」がキャリア教育だと思っていた。何をしたらいいかわからなくなった。高等部の場合「出口教育」も必要。1~3年生のたとえば「進路学習」「人とくらし」など流れが整理できていないので、同じ内容を繰り返している、ということもある。大きなライン(基本)を決めていって学年の様子で実施するのがよい。
- ・ 当たり前に行っていることが「キャリア教育」、普通に教えていけばいいんだなと思った。生徒に関わる、生きる場所、すべてがキャリア教育につながるということがわかった。日々の生徒への思いでよいのだと感じた。
- ・ この研究を進めることで、小・中・高の指導のつながりや連携の根幹ができるといい。指導にあたるに際し、画一的になりすぎるのも問題だが、学校目標に則した指導や一貫性をもった指導を見つけていくための礎になればいいと思う。

校内講演会:松為信雄先生からの学び

- ・ 「キャリア教育」という言葉=「働く障害者」とズレた理解をされている方(私も含め)にとってもわかりやすく伝えていただけた。4つの構造図はとて理解しやすく、いかに教育を「縦」で見えていくか、学校教育が風通しの良いものであることの大切さを改めて感じた。
- ・ いつもひっかかる「キャリア教育とは」ということに対し、本来の言葉どおりの意味での「進路指導」であるという話は納得しやすかった。
- ・ キャリア教育の考え方の根本がすべて就労に向けてという流れが未だ多くはびこっているが、発想の転換で、個々にあった普段我々が実践している教育がそのまま子どもたちのキャリアになること、QOLの質を向上させ、社会に役立つ力をつけさせる教育こそが重要であると確認した。積み重ねこそ力になることが間違っていなかったことを再確認できた。
- ・ キャリア教育についてもやもやしていたものがすっきりした。個別教育計画がしっかり作れるかが大きな課題である。
- ・ キャリア教育について理解がすすみました。特に「ライフキャリアの虹」や「役割」の話はよく分かった。ただ「個人特性の階層構造」を考えたとき、重症心身障害児はどうなるかと悩んでしまう。
- ・ 今まで取り組んできた「生きる力を育む」とこと、「キャリア教育」に大きな違いがないということがはっきりした。課題はどう体系化するのか。何をベースに体系化を進めるのか、それらの作業に実践をどう絡めるのか、だと思えるようになった。

校内研究協議会:菊地一文先生からの学び

- ・ 「キャリア教育」が丁寧な説明でよくわかった。担当している児童は今ひとつ将来についての未来像が見えずに個別課題で形や色の弁別をしていたが、自分の意思を将来表出させるためにあるのかな…と「キャリア」の考えとのつながりがなんとなくわかった。それよりも、「キャリア」→立場や役割という考えがしっかり理解できた。キャリア=仕事っていう考えだけでなく、人との関わりの中で得られる立場や役割という考えをもってこれからも子どもたちと学び合っていこうと思った。
- ・ キャリア教育の必要性や、授業の生かし方のポイントが見えた気がした。授業の中の細かい点の大切さを改めて感じた。位置付けシートで、キャリアの観点を意識してみようと思った。
- ・ 今日の授業ひとつひとつをキャリア教育の4つの能力領域からコメントいただいたことはとてもわかりやすかったし、おもしろかった。キャリア教育と普通の授業や学校生活が自分の中で結びついたように思う。
- ・ 小さなことでも、いかに子どもの思いを拾っていくか、実際的な体験につないでいくかを考えさせられた。
- ・ 具体的な様々な学校の事例の話が良かった。本校とのレベルの差があったが、目線や考え方を変えると自然とキャリア教育に当てはめることがなんとなくできた。
- ・ 生徒の願い、気持ちへのアプローチするという点は普段大切にしているので共感をもつと同時に考えが深まった。

校内講演会:石渡和実先生からの学び

- ・ これまでのキャリア教育講演会は、肢体不自由についてはオマケの様であったので、特に重い障害の子どもたちに焦点をあてた講演はとても良かった。考え方についても自分が考えていることと大変近く、共感できることが多かった。ただこのような考え方をあえて「キャリア教育」とよぶかどうか…はよくわからない。
- ・ 重度の子にとつての「キャリア、のとりえ方について、これまで考えてきたことで良かったのだ、との確信をもてた。
- ・ 学生の頃学んだこと、また昔懐かしい先生方の名前が沢山出てきて、忘れそうな、でも一番大事なことを思い出すことができた。再認識した。インクルージョンのことばの意味、キャリア教育に向けて、学ぶことができてありがたかった。

おもな啓発資料

- ① 学校だより巻頭言:キャリア教育(1)～(5) <教員・保護者・地域向け、HP掲載>
- ② 金沢のキャリア教育だより(1)～(5) <教員向け> (研修報告、キャリア教育Q&A)

おもな成果物

- ①『校内研究のまとめ 各部門・学部の研究とキャリア教育(2010. 3. 19)』

肢体不自由教育部門:

「学部重点目標の評価について:個別教育計画とキャリア教育との関連を探る」

知的障害教育部門小学部:

「キャリア教育の視点にたった、教科・領域を合わせた指導の内容整理・検討」

知的障害教育部門中学部:「指導内容の、キャリア教育の視点による分析整理」

知的障害教育部門高等部:「授業『人とくらし』を分類し系統性を表にする」

- ②『ワークシート:初任者研究授業指導案をキャリア教育の視点で見よう』

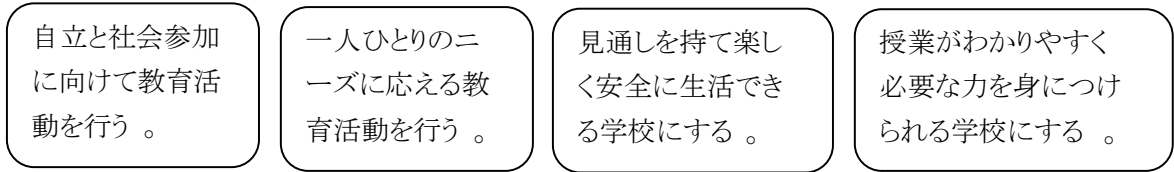
3 平成22年度のとりくみ

(1) コンセプトを概念図として提示

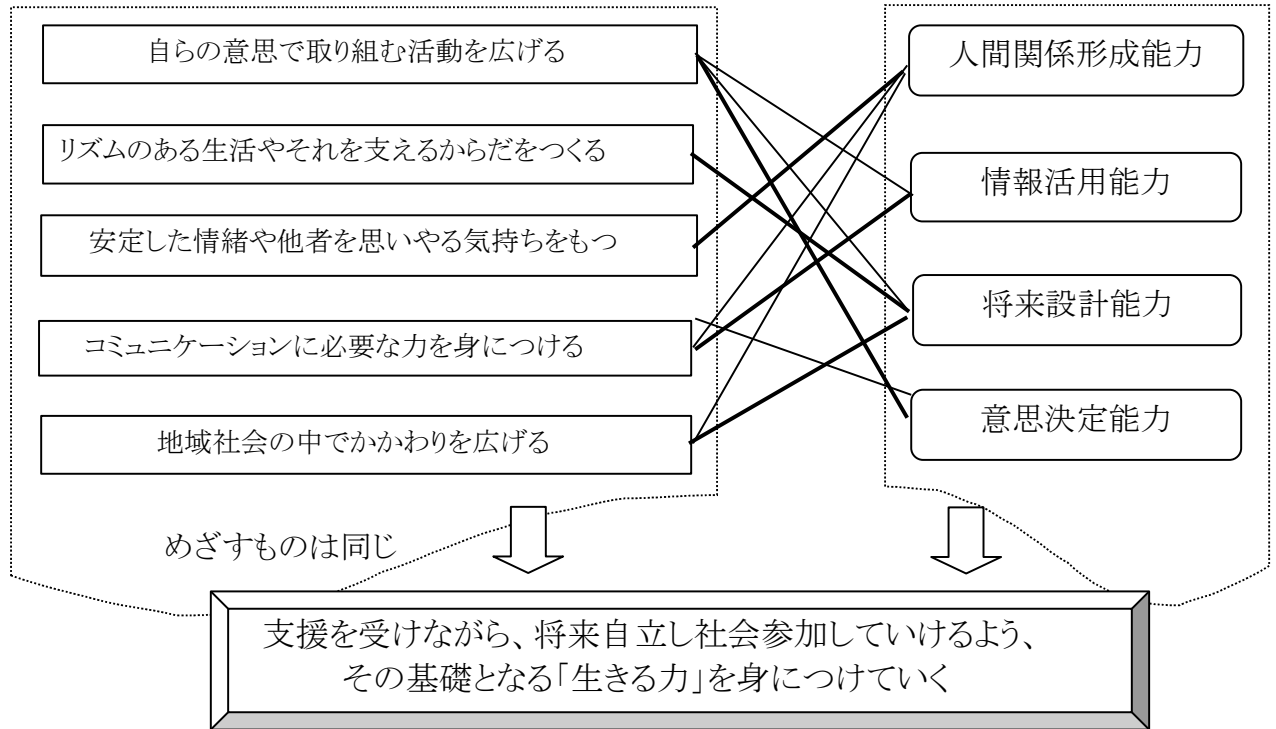
2年目になるにあたり、新転任者が増えたこともあり、全教員で「キャリア教育」について再確認する意味で「コンセプト」という形で概念図を作成し提示した。特に本校の5つの学校教育目標とキャリアの4つの領域の関係付けをして、キャリア教育がこれまで本校のめざしてきた教育と何ら変わりのないことを明示した。

「金沢のキャリア教育」のコンセプト

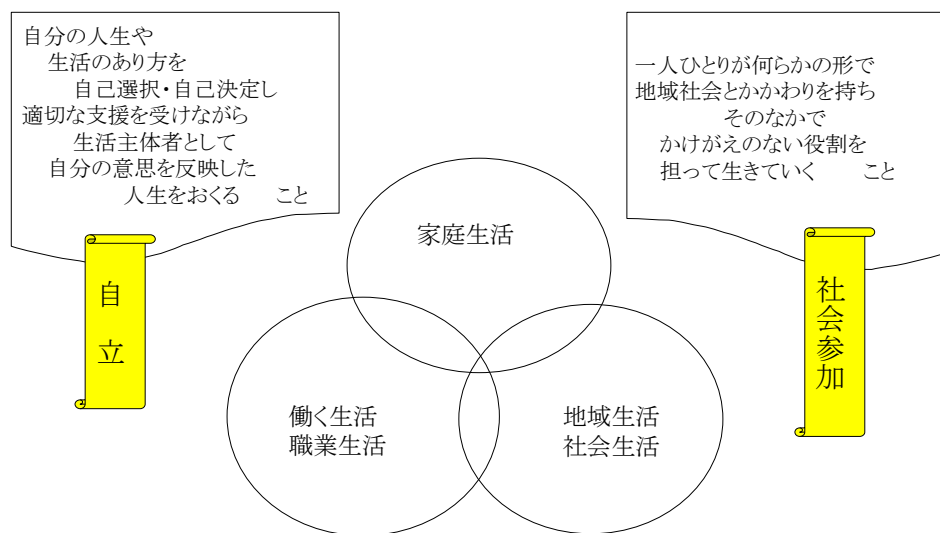
◆ 原点として大切にしたい開校の理念



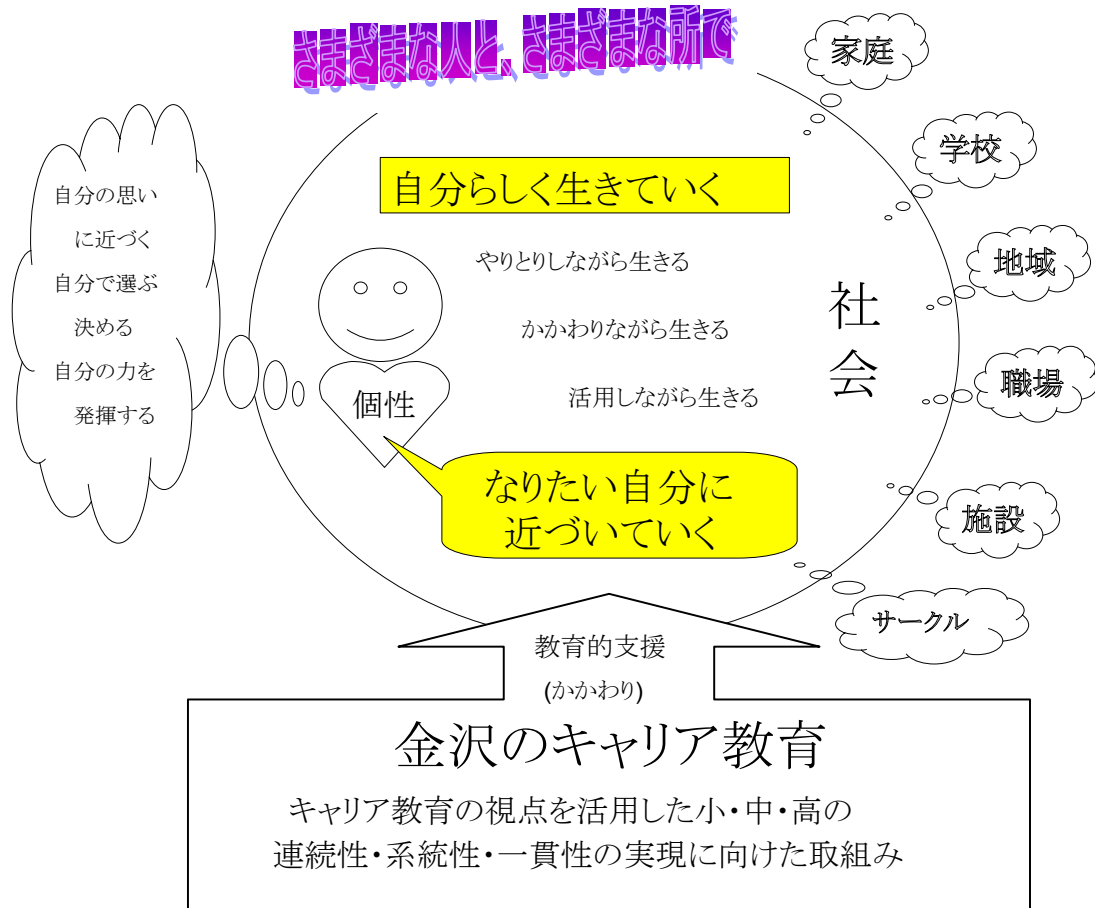
◆ 5つの学校教育目標とキャリア教育4領域との関連



◆ 金沢養護学校キャリア教育プラン(2008)で示されている概念



◆ これに新たに加えるコンセプト

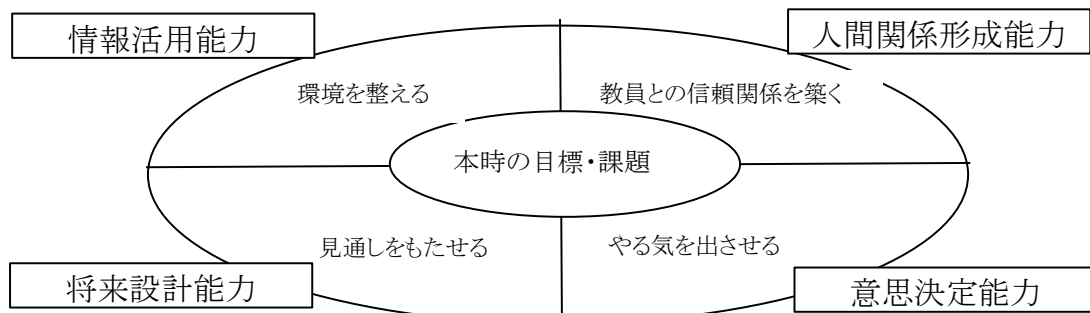


◆ 「キャリア教育の視点」の押さえ(共通化)

【指導の内容として】(例)

4 領域	具体的な内容 (理解・思考判断・表出・行動場面によって複数の領域にまたがります)
人間関係形成能力	他者の受け入れ、挨拶、コミュニケーション、やりとり、関わりあい、集団参加、交流及び共同学習、協力、自他の個性の尊重と発揮、清潔・身だしなみ等のマナー、場に応じた言動
情報活用能力	刺激や環境の把握、指示理解、情報の収集と取捨選択と活用、ルールやTPOの理解、自己表現
将来設計能力	健康の維持管理、基本的な生活習慣・リズムの形成、時系列の理解、見通しを持った行動、夢や希望、やりがい・生きがい、役割の遂行、予定や計画づくり、地域社会との関わり
意思決定能力	刺激や環境に対する反応、快不快の表出、自己選択自己決定、セルフコントロール、振り返り

【指導の手立てとして】(例)



(2) 「キャリアの観点」を明記した指導略案の作成

今年度より、各部門・学部の普段の授業で、キャリアの観点をねらい・展開等に明記した独自の指導略案の形式を採用した。そしてすべての教員がキャリアの観点を意識して指導略案を作成して日々の授業を実施するように心掛けた。また、授業の反省や次の授業の組み立てにあたって、その指導略案を活用するようにした。

(3) 中間報告会で各部門・学部の進捗状況を確認

9月29日に全校で中間報告会を催し、各部門・学部の取り組み状況と現在までの到達点を発表しあい、全校でその内容と方向性を共通理解した。そのなかで、金沢養護学校における「キャリア教育」の4領域のとらえについて、次のように具体的に提示した。

キャリア教育の4領域	どのような領域か	どのような内容か	どのようなことをめざすのか
人間関係形成能力	社会(集団)のなかにおける自分の立場や役割を学び、適応力をつけていく領域	<ul style="list-style-type: none"> ・公共施設や交通機関の利用 ・介助や支援の受け入れ ・コミュニケーション ・やりとり 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会(集団)のルールに従えるように ・親や担任以外の人にも応じられるように ・気持ちを表現したり訴えることができるように
情報活用能力	今必要な情報を選んだり集めて、自分の考えや判断に使ったり役立てていられるようにしていく領域	<ul style="list-style-type: none"> ・情報や刺激の取捨選択 ・ルールや仕組みの理解 ・仕事や役割の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を自己防衛や危機回避に使えるように ・体内からの刺激に適切に対応できるように ・手がかりを活用して行動調整ができるように
将来設計能力	先を見通して行動に必要な準備をまえもってできるようにしていく領域	<ul style="list-style-type: none"> ・あるべき姿やゴールの理解 ・手順や方向性の理解 ・心の準備や構えの形成 	<ul style="list-style-type: none"> ・出来上がりがわかったうえで取り組めるように ・やるべきことがわかったうえで準備できるように ・結果を予測して体をコントロールできるように
意思決定能力	他人のいいなりや他人任せから脱却できるようにしていく領域	<ul style="list-style-type: none"> ・自主性、積極性 ・好奇心 ・最後までやりとおす気力 ・結果の受け入れ ・振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援を受けながら自分で答えが出せるように ・条件や制限がついても選択できるように ・悩んだり葛藤したうえで結論が出せるように

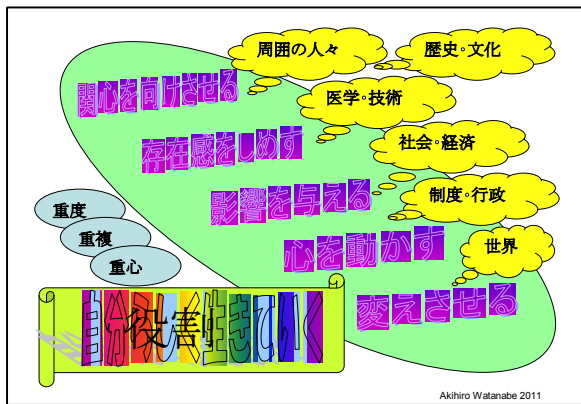
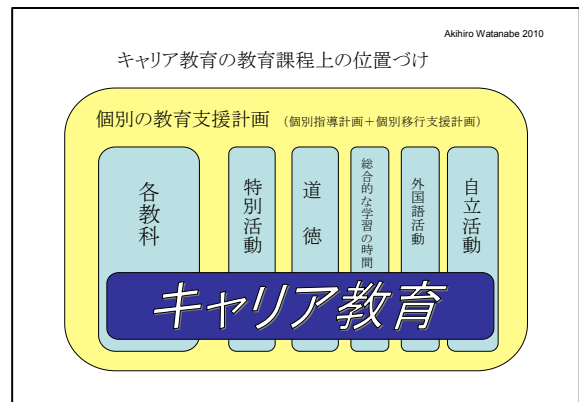
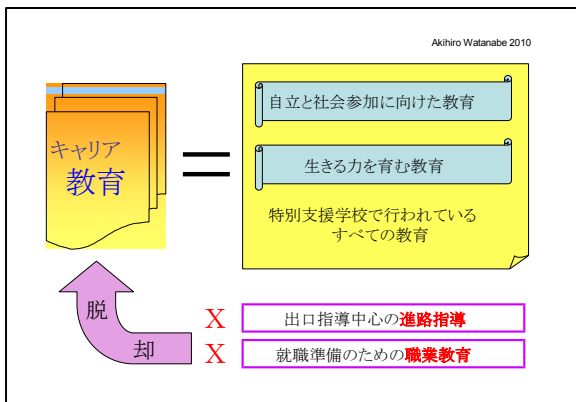
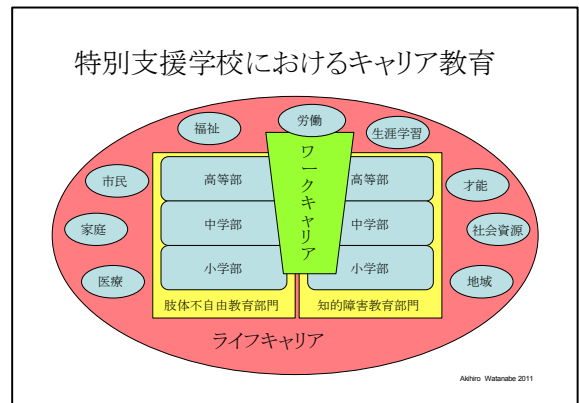
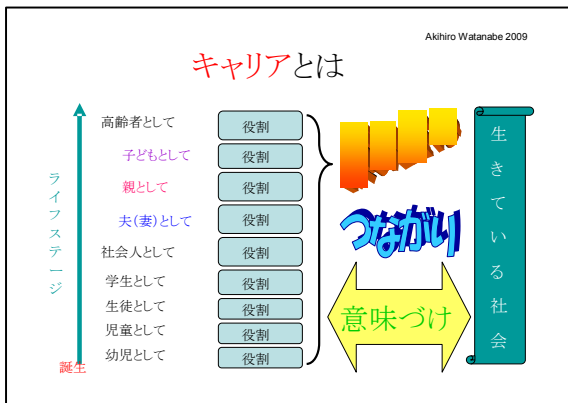
合わせて、保護者や担任が支援した時だけできるようになっても「自立」とはいえないこと、家庭や学校の間だけでできるようになっても「社会参加」とはいえないこと、つまり地域・社会のさまざまな人と、さまざまな場所で同じようにできるようになることが、学校で行う「自立と社会参加に向けた教育」＝「キャリア教育」の大きな側面であることも示した。

そしてすべての児童生徒が地域・社会で自分らしく生きていかれ、なりたい自分に近づいていられるように、小学部から支援していくことが「金沢のキャリア教育」であると再確認した。

4 研究授業・公開研究会でのとりくみ

(1) 研究授業・公開授業

(2) 経過報告



(3) A分科会

<報告>

- ・ A部門とB部門の指導案の中身、書き方が違う。Aはこどもの思い、保護者の願いから出発している。Bは単元目標から。書式をABで統一というやり方もあるが、Aではこの部分を大事にしたいので、そのまま違う書き方にした。

<感想>

- ・ 肢体不自由教育では生命維持が最初にくるので、肢体不自由のキャリア教育をどうとらえるか疑問に思っていたが、ライフキャリアとワークキャリアがあって、ライフキャリアの部分を広くとらえるとあてはまるということを知ることができてとてもよかった。
- ・ 指導案の形式がよかった。授業は本校と雰囲気がかわっていない感じだった。授業案を見るとキャリアの観点があった。自分のところはまだつつこんでいない。自分のところもキャリアで確認していくとやっていたり、まだやっていないものがわかってくると思う。

- ・指導案を見ると子ども一人一人を大切にしていることがわかった。重心の生徒が多いなか、こういう考え方でキャリア教育を理解していけばよいのかということがわかった。どこに指導の中心をもっていけばよいかわかった。

<協議>

- ・自立活動とキャリア教育の観点との関連はどうか？同居は難しいのではないかな？
- ・新学習指導要領の自立活動の6領域とタイアップされれば全部含まれるのではないかな。人間関係形成能力を高める活動を考えると難しい。道筋は一つではない。人間関係形成能力は、他者を信用して、信頼関係を作ってから成り立つものなのは明らかになっているが、それがどういうプロセスで広がっていくのかは単純ではない。いろいろな要素が絡み合っているものである。
- ・3年のスパンで目標を立てることになったが、長期目標をどうしていったらよいか悩んでいる。
- ・キャリア教育はここ1、2年の取り組みである。小中高ABはほとんど同じ形式で個別教育計画を作っている。目標、手立て、評価、今後に向けてとなっている。1年は長期目標、半期を短期目標。Aでは、前後期合わせて同じ目標になることもある。

<石渡先生からの助言>

- ・福祉の現場と違って、学校はなんて手厚いのかというのが率直な感想。
- ・だから、1人1人をよく見てできている。しっかり集団の中で関係性をもって役割を果たしている。それぞれの生徒を活かしている。この12年を卒業後もどうバトンタッチするかが大きな課題である。卒業後は手厚くないので、地域をどう動かすかを考えて欲しい。重い障害の人を知っている人が地域にどれだけいるかが大切。金沢は、地域性が都会なのでつながっている。熊本は「故郷がなくなる」という言い方をしている。普通校から地元の養護学校に行く存在を忘れられてしまう。地域にアピールをしていかなければいけない。
- ・キャリアの視点と自立支援の視点は違うか。キャリアは長いスタンスで見えていくところが違う。12年で終わらない。「自分らしく生きる」というキャッチフレーズは素晴らしいが、地域との関係性の中で生きているという、バックグラウンドがあるのが大事である。

(4) B分科会

<協議>

- ・積雪地域の青森では雪片付けの力が求められる。就労ができなくても雪片付けができる子どもは、家庭や地域で評価が高い。キャリア教育を、即就職率向上といった狭い意味では結び付けられないが、キャリア教育で成果を上げたということ、一般校や地域社会の人にわかる感じで、説明できればよいと考える。
- ・肢体部門との関連で見ると、知的部門は「子どもの願いや希望を生かし支える」視点で、教師の夢や思いは強く感じたが、保護者や子どもの願いや希望を、どう汲み取っていくのか。
- ・保護者の願いは、個別教育計画と一緒に作っていくところで、子どもの願いは、担任同士が子どもの小さな変化をいつも話し合っているところから拾ってくるのではないかな。提示を多くし、興味関心を広げることにより、「やってみたい」と思う気持ち(願い)を育てている。

<菊地先生からの助言>

- ・キャリア教育の評価はキャリア教育研究が抱えている大きな課題でもある。「就職率」は、教育行政や施策としての評価の1つ。キャリア発達は目に見えにくく、子どもの中で形成されていくものなので、評価方法としてはいくつかの視点がある。子ども自身と子どもに関わる教師・学校・地域がどのように変わったか、子ども達がどのような興味を広げたか、目を向けたか等、丁寧に拾い上げ蓄積していくことや、子どもの願いをどう捉えるか、子どもの置かれている状況や経験、障害等をさまざまな背景から複数の見方で、丁寧に汲み取っていくことが大切である。
- ・この1年の研究で、キャリア教育の視点で授業を見直すことによって4つの能力領域というフィ

ルターを通して各授業が持つ意味を再確認することができたのではないか。

- ・キャリア教育の視点で見直すことのメリットは、授業単体だけでなく指導計画や教育課程全般にわたっての見直しや、児童生徒一人ひとりのキャリア発達に対して願いと指導のねらいの関係で捉え直しが図られていくことである。授業の中にある要素やどんな価値があるかということに気づけるようになり、その要素を拾い上げることによって大きく変わっていくと思われることは、例えば特別活動である。行事等が形骸化しているということが言われているが、その中でキャリア教育の視点で見直すことによって4つの能力領域の何を育てる価値のある授業なのか、ということが考えられる。
- ・また、例えば自立活動など繰り返して1つのねらいを達成していく授業や活動については、ねらいが、30回の内の1回目と30回目では同じわけがない。4つの能力領域を丁寧に見ていくとその順序性や押えどころによって授業そのものが質的に変わっていくのである。
- ・おそらく金沢養護学校で研究に取り組んだ大きな成果だと思われるのは、授業を見直す上で、また子どもたち一人ひとりのキャリア発達を考える上で、教員間の共通言語として「キャリア能力4領域」というものが有効になったのではないか。そして共同的な取り組みを進める土台ができたのではないか。加えて、学校、学部としての課題が分かり共有できたことがあればそれは大きな成果である。学部ごとの取り組みで進めてきたのであればぜひ縦割りですべてを共有してほしい。

キャリア教育について、気をつけてほしいこと

1 4つの能力領域は固定的でないこと

たとえば日々行っている「着替え」の活動でも“身だしなみ”にねらいを置くのであれば『人間関係育成能力』だが、例えば自閉症の子どもなど“手順表を見て正しく手順どおり行う”ことをねらうのであれば『情報活用能力』となり、明日は外食をするから“自分で服を選ぶ”のであれば『意思決定能力』となる。どのねらいにするか、というのは授業をやっている中で実はティームティーチングの教員同士が違ったことを考えている恐れもあるし、一人ひとりの子どもによって変わってくることもある。そこを見直すためにこのフィルターをつかうということでは有効である。一方で、固定的に「着替えは“身だしなみ”だから『人間関係形成能力』だ」と決めつけてしまうと誤解が生じるので気をつけてほしい。

2 キャリア教育の能力

キャリア教育という能力とは、アビリティ(=できる/できない)ではなく、コンピテンシーということ。コンピテンシーとは、育成する、一緒にやることでやってみたいという気持ちを育てていく、ということを含めた言葉。できる/できないの、できないという評価をしてしまうと次に進んで行かなくなってしまう。ともに育てていくという視点が求められ、支援のあり方が問われているということを留意してほしい。

3 キャリア教育を進めていく段階

今日の授業の中にもたくさんのキャリアの観点が盛り込まれてあった。いろいろな学校の段階を見て行くと最初は4つの能力領域の理解に苦労される。次の段階では、授業の“この部分にこの要素が含まれている”ということが分かる。そうなるがたくさん見えてくる。それが第2段階。次の段階が実はすごく大事。授業のどこに絞り込むのか、という評価する部分。そこで、授業としてのねらいが改めて捉え直される。今日の指導案の中にも、そこを位置づけるような工夫があればもう少し見る側の先生たちも分かりやすかったのではないか。

そう考えていくと、授業の中、指導形態の中に4つの領域がまんべんなく入っていなければいけない、と考えてしまうがそうではない。その中で重みづけをしたいもの、すべきものは偏って構わない。要は4つの能力を12年間の学校生活の中で育てていきたい力としてどの学部でどの部分を重点化するのか、どの指導形態の中で重点化するのかということ洗い出していくと、今ある指導計画の中を見ていくと傾向があるはず。その中で学校全体として、教育課程

をどのようなつながりをもってどのように工夫をしていくかを検討していく、改善の落とし所であるということをおさえてほしい。

研究所の報告書や書籍の中にそれをチェックするツールがある。それで学校全部の指導形態をチェックしたところがある。各学部・指導形態によって出てくる傾向が、学校の教育課程の特徴であるともいえる。課題が見えてくる、また強みを生かす部分でもあるので工夫していただければ。結局、量的に抑えるよりは質的にどこを重点化すべきかということが重要になってくる。

4 キャリア発達のつながり

ワークという視点でも、ライフという視点でも知的障害教育の中では小中高で数多く体験、経験を積んでいるが、それが子どもたちのキャリア発達としてどのようにつながっているのか、ということでもう一回見直す必要がある。現れ方としては、授業としては劇的に変わることは見えにくいかもしれないがその中で質的に絞り込んで具体的に積み上げていく中で、何が育っているのか、何の押さえが充分ではないのかを見ていく必要がある。

そう考えると、買い物、先ほどの調理と活動は違うがそこで含まれる内容…例えば選択すること、大切に物を取り扱うこと、適切にコミュニケーションをとることなどたくさんの要素がある。それは知的の各教科の中で取捨選択して合わせた指導で行っているからだと思うが、共通だがそれがどのように子どもたちに対してつみあがっているかでは、見直す必要性が、どういう取り組みをしてきても組織的に取り組むという意味では求められるのではないかと思う。

4つの能力領域の中で、ひとつこだわってほしいところ

自閉症の児童・生徒たちにとって 手がかりを十分に準備してそこで活用して情報活用能力の充実をしてほしい。意思決定するためにはそのための手立て、材料が必要となってくる。そういった意味では、肢体不自由部門で重度重複の子どもたちを丁寧に見てきたことがすごく役立つと思う。そこでのコラボレーションがまた新たなものを生むのではないかと思う。

キャリアという言葉を使っても使わなくても子どもたちが分かって動ける授業、「できた」と思えるような主体的に取り組んで達成感を得られる授業というのは、キャリア発達を促す立派な授業と言える。それを整理するためにフィルターを使って見ていくということだが、まだまだたくさん改善の余地はあると思う。作業環境、グループ編成・指導体制の妥当性、作業量一回の分量、評価方法(本人に分かる評価、本人にとってメリットのある評価、教科スケジュール、プロンプト依存になっていないか、待ち時間の軽減は図られているか、様々な改善の視点がある)そういったことの実現を考えていくと行動分析の視点、認知の視点、ICFの関連でもよい、どのように教えていくのか、という授業の質的な向上のための工夫、こだわりが今後求められる。そのことによって、今、学校全体が一つのキーワードでつながっていることがもっとさらに効果をあげるのではないか。

(5) 全体講演会

地域・社会につなげるキャリア教育 — 改めてインクルーシブ教育を考える —

東洋英和女学院大学 人間科学部教授 石渡 和実 先生

- ・『地域で暮らす』とは、単に『施設や病院でない所での生活』ではないはずであり、家族と一緒に生活(在宅・居宅)、住宅が立て込んでいる所での生活でもない。国際連盟(II)の「完全な市民権(Full Citizenship)」物理的な環境や生活様式の問題ではなく、重要なのは社会における地位(position)と役割(role)が保障され、関係性(relationship)が保てる事である。完全な市民権とは、①地位;居場所 ②役割;社会貢献③関係性;支え、支えられる、ささえあいが保障されていることである。(松友了:1996)

- ・インクルージョンの本質→多様性の尊重「みんなちがって、みんないっしょ」(権利条約の

キャッチフレーズ)

・ 強さ活用モデルの原則(リチャード・ゴスチャ)

- ①人は、学び、成長し、変化しうる能力を持っている
- ②焦点を当てるべきところは、個人の欠点ではなく、長所(強さ)である
- ③人は、援助プロセスでの主役である(当事者主体)
- ④援助関係を保つことは、第一になすべきことであり、必要不可欠なことである
- ⑤私たちの第一の働き場所は、地域(community)にある
- ⑥地域は資源の宝庫(oasis of resources)である

- ・ 第173回国会における内閣総理大臣所信表明演説(2010年10月26日)で当時の鳩山首相は、「共生社会の実現」『居場所と出番のある社会』のなかで、川崎市にあるチョーク工場:日本理化学工業を訪れて、社長の大山泰弘氏から聞いた話を取り上げた。

「知的障害者の特性や考え方に応じて、『働くことだけがベストと考えるべきでない』という

声に対して、それもわからなくはないが、とにかく働かせてみて、この子たちの働いている様子を見てから言ってほしい。彼等は企業の中で、本当に生き生きとして輝いている。学校や施設の中では見られなかった表情を示す。それはなぜか。人の役に立っていることを実感しているからだ。あるお坊さんが人間の『4つの幸せ』ということを言っていた。企業で働くからこそ、4つの幸せの中の特に②③④が叶えられる。このような幸せになれる機会(働くこと)を、知的障害者から奪うべきではない」僧侶による「人間の4つの幸せ」とは、①人に愛されること、②人に認められること、③人の役に立つこと、④人に必要とされることである。

・「これからはインクルージョン」日本地域福祉学会第20回大会(2006年)

「障害がある人も、介護が必要なお年寄りも、小さな子どもも、外国籍の人も、全ての人が必要な支援を受け、地域に包み込まれて、役割をもって、生き生きと暮らす」

- ・ 「厳しい命」を支える実践賞を受賞した諏訪中央病院管理者(長野県茅野市)鎌田實さんは、日本型ノーマライゼーションにふれ、「ホスピス病棟でもそう。赤ちゃんのように周りに支えられ、世話される側が、実はすごい力を持ち、相手を支えているんだね。」(2004. 4. 25)
- ・ 同じく実践賞を受賞した重症心身障害者の通園施設「朋」の理事長・日浦美智江さんは、重症心身障害児・者の役割として「時々、私は半ば冗談のように『重症心身障害のみんなに働く場を下さい』と言います。働くとは、お金を稼ぐことではありません。みんながその役割を果たせる場のことです。みんなは何もできない人ではありません。その場が与えられれば社会の一員として、私たちにはできない『心をつなぐ』仕事ができるのです。光は世の中の人に見えなくてはなりません。その橋渡しをするのが私たち福祉職の役割なのです。」と話している。

・ エンパワメントの意義(石渡)

地域での生活により障害者自身も大きく成長し地域も変わる(エンパワメント)

→ 障害者本人が地域で生きる力を付けていくとともに、障害者が生きられるような社会に、地域を、地域の人を変えていくことの重要性。

このような積み重ねにより、ノーマライゼーション・インクルージョン社会の実現に至る。

・ エンパワメントのポイント(石渡)

- ① 人間観の変化: 支援を受ける人々が「かけがえのない存在」に
- ② 支援方法の変化: 訓練・指導ではなく当事者主体で「寄り添う」に
- ③ 社会の変化: 地域の人々を巻き込んで「支え合う」社会変革を

(6) 全体会

<質疑>

Q 高等部段階の生徒のアセスメントを行う際、職員の共通の思いとして、自信のない生徒の

方々が多い、ということがあげられる。そのため、緊張やパニックを起こしやすい。子ども達の行動を修正していることが、結果として子どもを否定していることになってはいないだろうか。キャリア教育とは、自信を積み上げていくことと考えるが、各学部の中で、自分らしく生きる、子どもに自信をつける授業をどう取り組んでいるのか。

- A 小さい児童の場合、好きなことをたくさんして、ほめて認めてもらう体験が大切だ。新しいことをするときには、失敗しないようにスモールステップを踏んでいく。初回に、何をしたらよいか分からない児童には、今はやらなくてもよいと伝える。見ていることで場を共有し、やってみようという気持ちを引き出す。またやりたくなるような環境設定をしている。(小B)
- A 縦割りの作業学習が中学部の柱。3年生は基礎的力がついている。手掛かりが充実していることで、空いている時間を自分で判断して動いていた。高等部に行くための力をつけることとして、係、役割分担が毎日のルーティンとして充実していた。家族やクラスメイトに喜ばれることが、製品づくりで社会に貢献する自信につながる。また、お互いに喜びあったり、感謝を共有したりすることも自信づくりとして大切だと思う。(中B)
- A 経験不足による自信のなさへ経験を積み、慣れることも大切。現場実習では、小さくてもよいので、成功体験をという合言葉でやっている。社会的役割を果たす事により喜ぶ年齢でもある。頼られ、必要とされることにより自信がつく。時間をかけて積み上げ、少しずつ自信を持たせて社会に出したい。(高B)

<石渡先生の講評>

- 学校をあげてキャリア教育という柱を立てて、教員一丸となって教育の質を大きくかえることになったと思う。それぞれの子の段階にしっかりと教員が応じている。共有できたことを今後、どう生かすのか。地域に広げることについても戦略を持ってほしい。金沢のキャリア教育から発信する地域づくりができるのではないかな。全国には色々な切り口がある。全国各地とネットワークをつくり、金沢のキャリア教育が今後どう展開していくか楽しみ。金沢の地域性と全国のネットワークを、キャリア教育を柱につなげてほしい。日々の活動を深めていけることはうらやましいが、大変。でも成果として表れている。発信、発展を願っている。

<菊地先生の講評>

- 組織的なつながりができたことは財産。今日は「願い」が多く出てきたが、それはキャリア教育の中核である。好きなことだけでなく、経験を広げていくことも重要。ねらいの絞り込みと、つながりの確認。「つなぐ」というのは、学校全体のつながりでもあり、地域のつながりでもある。今体験していることを意識し、方向づける支援をし、振り返ることも大切。学校教育の現代的な意味を考えたい。今後、子どもたちの生活する場、働く場が変わってくる。そこで、キャリア教育の視点で学校教育を捉えなおしてほしい。挨拶ひとつとっても、地域で通じる挨拶、職場で通じる挨拶と、学校でしている挨拶は一致しているか。
- 学校から地域に発信してほしい。地域で学ぶことで、社会に対するあこがれが生まれる。あこがれの対象は地域の人や、学校では先生やバスの運転手さんかもしれない。また、家庭でも家族に対するあこがれは作れる。小学部の段階から、地域に発信することを丁寧にしてほしい。そのために、外部講師や体験活動を活用してほしい。地域の人に知ってもらうことで、支援ネットワークが作り、それが教育効果をうむ。地域にあるもので、何を生かすか、いかに学校に外の空気を入れるか。人の役に立ってうれしいということも、学校の中だけで完結するのではなく、より多くの人の中での経験をさせてほしい。
- キャリア教育は竹の節目づくりと表現される。節目をつくることでしなり、折れない。キャリアデベロップメント(キャリアの開発)は、児童生徒本人はもちろんであるが、環境(学校、教員、地域)の開発でもある。教員も教えられ、学んでいる。それを還元してほしい。

5 研究授業・公開研究会を終えて

研究会に参加された方々からの感想・意見

- ・学校全体で取り組むことで、先生方の意識の統一感があった。(埼玉)
- ・「キャリア教育だより」を見て、キャリア教育への取り組みの様子がよく分かり、悩まれ、研修・協議を積み重ねながら、努力されている姿を読み取ることができた。(千葉)
- ・先生方の意識が変わったと言われたが、その意識の変化を保護者や地域にどう伝えていくのか教えてほしい。2年間ではなかなか結果を出しにくいので「これからの課題」を聞きたかった。(評議員)
- ・石渡先生の講演からいくつか大変なことを気付かされた。キャリア教育は子どもの可能性を広げてゆくものだが、同時にキャリア教育の視点を持つことで、教員集団もまた変わっていかなくてはならない。しかし、その変化は学校の中だけにとどまることなく、排除のない社会、「できるかできないか」だけで見ることなく、たとえできることは少なくともその方が必要とされ、居場所があるそういう社会を目指していかなくてはならないと思った。(神奈川)
- ・地域の中で自分らしく生きる。:非常に参考になる話だった。(富山)
- ・なぜ4つの領域で考えるのか、ということを分かりやすく発表してもらい、とても参考になった。何気なくやっつけてしまっている授業を、今一度見直してみたいと思う。また、学校全体で取り組むと大きな変化を遂げることができると感じた。(愛知)
- ・大変正直な内容で良かった。どの学校でも苦勞してやっていると思うが、良く工夫し、上から目線にならずにやっていること、大変好感が持てた。分かり易かった。(青森)
- ・指導案を見ると、授業や支援の案が、児童生徒の将来を見据えて作成されたということがよく分かった。非常に分かり易く、使いやすい形式だと感じた。(石川)
- ・指導案にキャリアの観点を加えるやり方はとても参考になった。ただ、「つなぐ」というキーワードに関して、前時やこれまでの各子どもの積み上げが見えてくると、より授業が深く見れる気がした。(埼玉)
- ・知的の学校におけるキャリア教育の捉え方が整理され、共通認識のもとに授業が進められていることが分かり良かった。キャリア教育の視点で授業を改善するメリットも、菊地先生から話して頂き、自分の学校でも、先生方にたくさん伝えていきたいと思った。(東京)
- ・菊地先生が言われたように、一つの活動でも複数の視点(領域)で見られるし、子ども一人一人でも一つの活動に求める領域が違ってくると思うので、それも見えるようなものができると思い思う。(神奈川)
- ・日頃職員間で確認しあう「略案」については学習の目的が流れてしまいがちなので、一つ一つの行動が何をねらっているのかを明示している今日の略案は一つの参考になる形と思う。(神奈川)
- ・領域を意識する上では良いと思うが、そこから学習にどう下ろすかも大切なのではないかな。(富山)
- ・教育の中に、「キャリア」という視点が入ることで、長期視点や、児童生徒の主体的な「願い」につながることを学ぶことができ本当に新鮮だった。今後の教育活動の意味づけ、整理、改善につながるよう生かしていきたいと思う。(神奈川)
- ・4領域のどこにあてはまるのか意識することは非常に大切だし、必要だと思うが、活用内容→領域に割り振るのではなく、その領域能力を付けるために→この活動内容・支援をすべきだと感じた。(静岡)
- ・本校でも単元目標や生徒の活動の中に4領域を書き込む書式をとっている。評価についての記入をどうしていくか考えていたところだったので、いくつかの指導案の中から参考にしていきたい部分があった。研究のすすめ方とあわせての課題となるかと思うが、本校では4領域を書き込むことで、その言葉にとらわれてしまい、授業としての目指すものや個々の実態からの目線やねがいが遠ざかってしまうこともあった。本校、高等部の指導案や単元計画作成の際に、実習先からの評価についても書き加えるようにしている。(千葉)
- ・このように授業案を見直す形で表現すると、分かりにくかった「キャリア教育」について、具体的に分かる部分が大きくなって良かった。(神奈川)
- ・菊地先生の助言、石渡先生の講演、どちらもとても分かり易く有意義だった。人選も素晴らしい！(青森)

研究授業を見られた方々からの感想・意見

- 全てにおいて人的支援が過剰すぎて、意思決定能力につながる“自分で考える”とか“問題解決する”といった機会を与えていないように思えた。菊地先生が言われたように、意思決定能力を高めるための情報活用(手がかり)がもっとあって、もっと児童・生徒に任せたら良いのではと思った。(静岡)
- 全校の先生方が、同じ目標に向かって頑張っている様子が授業の随所に見られ、とても素晴らしいと思った。事態把握について、観察が中心になっているように感じた。全校で同じような、発達段階表等が(高等部では、学習ステップ表があったが…)あったり、アセスメントが活用されていると、更にパワーアップされた授業が展開されると思った。(東京)
- “あったか言葉”と“ちくちく言葉”という、生徒に親しみやすい言葉が印象的だった。私の学校でもソーシャルスキルを身に付けさせなければならない生徒が多い。ロールプレイを通してどう感じるかを考えさせる方法を参考にさせて頂こうと思った。(愛知)
- 作業学習の中に、キャリア教育の視点を取り入れての取り組みの難しさを感じた。小～高への移行期間、働く生活のはじまり等、中学部の難しさはあるが、作業学習、課題学習の整理などが必要だと思った。(千葉)
- 小学部段階で身に付けたい力を、キャリア教育の視点で整理し、より具体的で実際の活動を通して、身に付けられるように設定されていた。(高知)
- 個に応じた支援、言葉かけをたくさん見ることができた。教材の工夫に感動した。偶然かもしれないが、小・中とも終わりの歌が同じ歌で、もし生徒たちが以前から継続してこの歌で終わりを意識しているとしたら、生徒にとってすごく分かり易い活動だったろうと感じた。(石川)
- 子どもが演奏しやすいよう、楽器を改良されたのが印象的だった。大きな音に刺激を受け、不安になる生徒がいるのか、ピアノの音も調整されていた。(評議員)

本校職員の事後アンケートから

- 金沢の教育の方向性が、間違っていないということが実感できた。
- このテーマに内包されている「自分らしく生きていく」「なりたい自分に近づいていく」というキーワードは、日々子どもと関わる上で大切にしたいキーワードであり、非常に良いキーワードだと思っている。
- 指導案の【情】【将】マークと、評価のレーダーチャートは金沢スタイルとして残していきたい。
- 小Bで、意思決定の場面を多く設定しているのに、高Bの発表で重度の生徒には意思決定が難しいという発表であった。そのあたりの一貫性は必要だと思う。
- まだ全校で「キャリア」について、共通理解が十分に図れたとは思えないが、共通の言葉を使って子どもたちへの関わりを話し合うことができた。このことは、一貫した指導につながるものとして良かったと思う。
- テーマが広いので、様々な授業で捉えることができた反面、広いがゆえに本来ならば各学部のつながりを考えた方が良かったのだろうと思うが、そこまで手が回らなかった。
- 「キャリア教育」をより身近なものとしてとらえられるようになり、日々児童生徒と関わる上での自分の意識改革につながった。
- 以前はキャリア教育＝ライフキャリアを考えるとと言われてもピンとこなかったが、少しずつ「こういう視点もあるんだ」という気づきを得られた。でも未だにまだまだ理解が浅いなと思う。
- 以前は就職に直結する内容だけを「キャリア教育」だと思っていたが、そうでないことを改めて知った。
- 「ワークキャリア」のみではなく「ライフ」としてのキャリア教育として考えると、小低のうちから育てていかなければならない課題が山積みであることが認識できた。大きな意味が「願い」であれば、より具体的なものは「興味」かと思う。子どもの興味を細かく拾い上げ、丁寧に見ていくことで、願いにつながられるような指導を目指したいと思った。